$\Omega \subset \mathbb{C}^n$ を有界擬凸領域、$u_0$,$u_1$ を $\Omega$ 上の多重劣調和関数とする。$S = \{1 < |z| < e\} \subset \mathbb{C}$ とおく。$\Omega \times S$ 上の多重劣調和関数 $\hat{u}$ を、以下の式で定める：

$$\hat{u} := \left( \sup \left\{ \hat{v} \in PSH(\Omega \times S) : \hat{v} \le 0, \limsup_{\log|\zeta| \to j \le u_j(z)(j=0,1)} \right\} \right)^*$$

ここで、$(\cdot)^*$ は上半連続化を表す。これを用いて、$u_t := \hat{u}(\cdot, e^t)$ とおく。$\{u_t\}$ を、$u_0$ と $u_1$ を結ぶ**測地線**と呼ぶことにする。

**定理１**　$B$ を $\mathbb{C}^n$ 内の単位球、$u_0, u_1$ を $B$ 上の多重劣調和関数とする。$u_0, u_1$ はトーリック、すなわち $|z_1|, \ldots, |z_n|$ のみに依存するような関数であるとする。$\partial B$ 上で $u_0 = u_1 = 0$ であり、$u_0, u_1$ の極は原点だけとする。このとき、次の (1) と (2) は同値である：
(1) capacity に関して、$u_t \to u_0$ $(t \to 0)$。
(2) 任意の複素曲線 $\phi : \zeta \mapsto (a_1\zeta^{b_1}, \ldots, a_n\zeta^{b_n})$, $a_i \in \mathbb{C}^*$, $b_i \in \mathbb{Z}_{>0}$ に対して、$\nu(u_0 \circ \phi, 0) \ge \nu(u_1 \circ \phi, 0)$ が成り立つ。

ここで、擬凸領域 $\Omega$ 上の関数列 $u_n$ に対し、capacity に関して $u_n \to u$ であるとは、任意の $\epsilon > 0$ と任意のコンパクト集合 $K \subset \Omega$ に対し、$\mathrm{Cap}(\{|u_n - u| > \epsilon\} \cap K) \to 0$ $(n \to \infty)$ が成り立つことをいう。ただし、Borel 集合 $E$ に対し、

$$\mathrm{Cap}(E) := \sup \left\{ \int_E (dd^c u)^n : u \in PSH(\Omega), -1 \le u \le 0 \right\}$$

と定める。